組合NEWS号外

Faculty and Staff Union of Kanazawa University
発行：金沢大学教職員組合執行委員会
住所：金沢市角間町　角間内線２１０５
直通電話(076)262-6009（FAX同じ）
E-mail kanazawa@ku-union.org

2009年3月18日

No.12

速報版

３．９人間社会学域説明会

人間社会学域にて「中期目標・中期計画」に関する説明会が開催

３月９日（月）、人間社会第1講義棟１０１講義室にて、片桐人間社会研究域長の主催で「第２期中期目標・中期計画」に関する２つの説明会が開かれました。まず、１６時半から、「中期目標・中期計画準備室」（「準備室」）の「研究WG」メンバーとなった野村系長（経済学経営学系）による「中期目標・計画（第二次原案）の「研究」に対する人社系の対応について」と題された説明がありました。同じ会場にて17時からは、「第二期中期目標・中期計画（第二次原案）に関する説明会」が開催されました。「準備室」に設置された「研究WG」座長の福森先生、「教育WG」座長の中島先生がそれぞれ研究と教育に関して説明され、質疑応答がなされました。「準備室」室長の桜井理事も参加され、１８時半まで、約２時間にわたる会合となりました。今回の報告では、とりわけ問題が多いとされる「研究」に関して、１７時からの議論を中心に報告し、感想を述べます。「教育」に関しては、改めて報告できたらと思います。

ＴＴ制度はまだ有効性が検証されているわけではない

１６時半からの会議では、野村系長から、全学の「研究WG」で議論されていることや人社研究域なりに要求した点について説明がありました。これを踏まえて、17時からは福森先生から、「テニュア・トラック（ＴＴ）、サバティカル、キャリアパスという新しい制度についてWGで検討中である」、などの追加説明が少々あり、すぐに質疑応答に入りました。まず参加者から、TT制はどのような成果があるのか、それを踏まえたうえで導入を検討すべきであろうが、現状を説明してほしいという意見が出されました。これに対して福森先生は、TTのプロジェクトは今年度で３年目になることなど、具体的に現状を話されました。ただし、期待がもてる制度だと思うが、まだ成果を検証できる段階ではないとのことです。成果が未検証のまま数値目標化して導入しようとしていることに対して、野村系長は各研究領域の特性を尊重してもらいたいと要望しました。３０%という数値目標が、そもそも優秀な人材を確保したいという目的に対する措置には結びつかないという意見も野村系長から出されました。ＴＴにしろ、キャリア・パスにしろ、同様の意見が何人かから出ました。一方、ＴＴ制度に関して桜井理事は、すべての学問分野に応用できるわけではないことは了解している、と理解を示しました。

数値目標を全く書き入れていない大学もある

また、他大学の「中期・・・」案に関する情報提供も参加者からありました。資料収集をしてみると、なんと、ひとつも数値を書き入れていない大学も何校かみかけたということです。書いてあってもたったひとつ、人件費を数年間で1%削減する、などというすでに規定路線となっているような事項が書いてあるだけの大学も何校あったそうです。金沢大学もこれにならって、まずはひとつも数値を書かずに文科省にもっていってもよいくらいだとのことです。また、組合の会議では、全大教の会議に出席された

先生から、金沢大学のプランはワーストワンのようだ、他大学からの出席者から驚かれ、笑われたということを聞いています。確かに、研究会などで他大学の先生方にこの話を出すとびっくりされます。悪い意味で突出した内容であることは間違いなさそうです。

ＴＴ教員を含めた任期付き教員30％の数値目標は再検討すると明言

数値目標に関する意見が出たなかで、福森先生は、「３０％」という数値に関しては検討事項とし、修正の可能性もある、桜井理事とその点を現在相談中であると話されました。これは、各学類や系からの意見が反映された成果ですし、もちろんこの間の組合運動の結果として誇ってよいものです。福森先生が、「この３０％という数字の書き方が非常に悪く、誤解を与えてきた」と率直に語っておられたのも印象的でした。福森先生はさらに座長の研究分野の発想がベースとなって作成されてきた点は否めないともおっしゃいました。福森先生は人社研究域の実態を知り、構成員の意見に耳を傾けていくことの必要性を一定程度認めたように思いました。

学長裁量ポスト拡大の問題点

さらに、センター教員は、教員定員の枠内から供出するもので、定員を純増させるわけではないことが福森先生から話されました。この点で人社研究域では大いに不安がもたれています。文系の教員の専門分野は、それぞれ「個人商店」であるとしばし例えられます。それぞれ異なった専門分野の者が集まっているわけですが、センター設置のために学長裁量ポストを吸い上げられると、たちまちその分野の専門家がいなくなり、各学類の教育プログラムが整わなくなるのです。

人社研究域は、４つの学部から６つの学類（系）になりました。「この再編過程のなかで、設置審の審査は免れ、「事前伺い」ですみましたが、各学類の教育プログラムを既に示している以上、これを実行していく社会的責任がある」と、片桐研究域長は話しました。片桐研究域長は、「この教育プログラムを実行するために、再編後4年間が終了するまで、つまり次期中期目標の最初の２年間、学長は教員を減らすことはないだろうと思うが、この点いかがですか」と桜井理事に質問されました。

これに対して桜井理事は、学長は「就任中は学域学類制を定着させることが自分の仕事」との方針で、少なくとも大学設置法で定めた人数を切る、ということを学長は考えていないと話されました。

野村系長は、「センター構想に関しては、人社研究域でも何らかの研究協力体制が今後必要で計画を練りたいと思うが、センターの中身をどうするか、研究専任の教員をはりつけるか、などの問題は各研究域の裁量のうちと理解したいが、この理解でよろしいですか」と福森先生に尋ねました。この問いかけに対して、福森先生は、「将来性があって期待できるのであれば良いと思う」と理解を示しましたが、「私は単なるWGの座長なので、法人に報告しなければならない」とのことでした。

また、人社研究域の研究特性を尊重してもらいたいので、中期目標には、「優れた人材が参集する大学を目指し、各学問分野の特性に対応して、優秀な人材の確保と育成のための仕組みを構築する」と、各学問分野を尊重する文言を書き加えてもらいたいという野村系長の要望に対して、福森先生は、「だめだ」とはおっしゃいませんでした。今後の運動の展開によっては、その文言が加わる可能性を大いに示唆させるものであったように思います。

トップテン構想は本気？

そもそも、今回の案のベースにある考え方は、学長の「トップテン」構想にありますが、これは、「トップテンになったらいいね。夢があるね」という程度の話であって、この構想が独り歩きしているとの意見が参加者からありました。「６年間、大学が持続可能な中期目標・中期計画であってほしい、そもそも高すぎる目標を掲げてつぶれたとき、桜井先生も学長も、もういらっしゃらないではないか」という意見も出されました。「中期･･･」の責任は、結局6年後も勤務している、多くのわれわれ一般教員がとることになるのです。考えてみれば、旧７帝大に筑波、広島、神戸大、これで１０校。この一角を崩して食い込まなければトップテンにはなれません。何を基準にするのかわかりませんが、東工大や

一橋大といった有力大学もあります。トップテン構想に関する学長先生のお考えをぜひ肉声で伺いたいものです。

さて、文系の教員の中には、研究で国内トップクラスの研究成果を出している方が何人もいます。教員が研究で光ることは当然ですが、卒業生が「金沢大で学べてよかった」と思える大学づくり、地域の方から必要とされる大学づくり、こういった意味でナンバーワンであることが、地方大学の基礎体力の重要な指標でもあるはずです。

全体を通して-「教員イジメ」はやめてもらいたい-

９日の説明会は、組合レベルのものも含めて、これまでにおいて全学で唯一の説明会でした。対面式で議論するのは、相互理解のためにやはり必要なことと改めて思いました。今後も、改訂案を公表して各構成員との意見交換をしてもらいたいと思います。文科省とのやりとりがどのようになっているのか、情報を全構成員に伝え、常に構成員との話し合いを大切にしてもらいたいと思います。参加者からは最後にそういった要望が出されましたが、桜井理事は応答をさけました。学内の合意が得られる案を作成し、構成員の協力を依頼することが役員の仕事です。構成員の意見に耳を傾け、構成員からの信頼を得られる手続きをとりながら、皆がやる気を出せる案を練ってもらいたいと思います。

多くの教員は、民主的な手続きを望んでいます。職階に関係なく自由に意見表明ができる機会が保障され、それぞれの意見が尊重されたいものです。こういった意思決定の手続きを大切にする文系教員組織には自由闊達な雰囲気があり、これが組織への貢献意識にもつながっていますし、学生にもよい影響を与えているとも思います。今回の案は「教員は締め付けないとさぼるに違いない」との偏見に基づいて作成されているとしか思えません。仕事への意欲を削ぐ内容です。そもそも全学再編の過程で、教員組織は疲弊しています。膨大な事務仕事に追われて長期間研究が疎かにならざるをえなかった教員、過重労働で体調を著しく壊した教員が多数います。当分の間は新たな組織での教育体制を整え、また通常の自分自身の研究に専念し、充実させたいと願っています。６年ごとに大きな改革をされたのでは、組織、教員の体力が消耗されるばかりです。これ以上の教員イジメはやめてもらいたいところです。

今回のプランには、役員の仕事に対する数値目標は何一つありませんでした。改訂プランで教員が納得していない数値を掲げるのであれば、役員も同様の見本を見せてもらいたいものです。キャリアパス（退職選択制）では研究費をいくら獲得できたかが教員評価の基準のひとつとしたいということですので、役員も寄付金集めを数値目標化するのはいかがでしょうか？目標金額はかなり高めに設定してもらいたいものです。大いに期待しますよ。

さて、ある参加者は、ノーベル賞を受賞した益川先生へインタビューをしたそうです。受賞のきっかけとなった研究は、通常の基盤研究費をもとになされたものだったそうです。あくまでも研究費は手段であって、良い研究成果を出すことが目的です。手段と目的を掛け違えないでもらいたい、との至極まともな意見がだされました。外的環境を考えれば、個人的には申請の努力をすることを厭うつもりはありませんが、採択されるかどうかは運も左右し、数値目標化にはなじみません。研究費の獲得イコール良い研究成果を出すことではないことも、どうぞWGの理系の先生方にはご理解いただきたいと思います。

（教員α）

３．９人間社会学域説明会に参加して

先の説明会では、福森氏や櫻井氏自身も中期計画・中期目標に書いた言葉を、十分理解しているとは言いがたい状況であるとの印象をもった。そのような状況の中で数値目標を‘最初から’掲げることに違和感を覚える。また、‘やはり理系の発想’との印象も改めて強くもった。ところで、キャリアパスの内容については、当日‘初めて’聞いた。今後何の議論もないまま進んでいくことだけは避けて欲しい。

（学校教育系教員）

ゴジラの計画、モンスターの目標
人間社会研究域、「中期目標・中期計画」説明会に参加して

月並みな感想ではあるが、そもそも教育と研究の場である大学にファシズムか社会主義経済まがいの「中期目標・中期計画」がなじむのかという根本的な疑問はあるが、それにもせよ、金沢大学では昨年９月から第２期中期目標・中期計画の準備室を作り、大学内の優秀な人材が準備室ワーキングを結成して、第１次原案、第２次原案と原案作りを重ねてきている。大学ホームページの予定では、３月１８日頃には第３次原案が示されるという。「自主的・自立的に」作られた中期目標・中期計画はどのような人々によって、どのような心情に基づき作られているのであろうか？準備室から来られた３人の先生方の中には、おでこに絆創膏を張った先生はいたが、それほどに異常な情熱に駆られているような雰囲気の人はいなかった。それどころか、組合若手の「挑発」にも乗らず、終始冷静な紳士振りであった。ほぼ５時から６時までの約束時間を勤め上げ、そそくさと引き上げていかれた。それにしても、そのような人々によって、なぜにこのような極端な数値目標を掲げた中期目標・中期計画が示されたのだろうか？ひとつのなぞ解きは、学長プランにある「ベスト１０入り」に対する過剰忠誠であろう。ベスト１０入りすれば、旧７帝大並みの予算になって、今よりも１・５倍の予算が付くという。本当か嘘か分からない努力目標に目がくらんだ、赤いニンジンに目がくらんだ馬か？過労死は目に見えている。もう一つのヒントは、文科省ばかりではなく、背後に総務省の意向があるという。例の郵政民営化をやり、今は簡保の宿の売却や東京中央郵便局の建て替えに待ったをかけて、選挙受けを狙っているあの役所の差し金という。イズレニセヨ、教育と研究には何の関係も無いお役所向けの文書作りに精を出し，かつては知性の府と言われた大学が無批判に役所の言われるまま、偽装された「自発性」によって文書作りをするというのは情けない光景である。もう１点見逃してはならないことは、それぞれのワーキングはそれぞれなりに「好い事」も言っている様であるが、全体としてみると、とんでもなく膨大な目標・計画となっていることである。これを確か「集合の誤謬」とか言うのではなかったか？世間の噂では、文科省のまねをして各地の教育委員会が小学校や中学校にまで教科とは無縁の「学校計画」や「自己評価」「地域貢献」などを押し付け、先生方は多忙のあまり悲鳴を上げているという。それで私はようやく理解した。文科省はまず多忙のあまり、校長や教頭の言う事を無批判に受け入れる教員を作り出すのと同じ手口で、大学の先生たちすら文科省向けの文書作りに多忙で、自分の研究以外余分な事を言わない研究者・先生方を作り出し、体制無批判の官僚天国を作り出そうとしているのだということを。これがモンスターの目標、ゴジラの計画であることを。東宝映画ではここでモスラかウルトラマンが登場するのだが、残念ながら、金沢大学ではそれも期待できず、個々の教員と組合こそが言葉の本当の意味での抵抗勢力となるしかないであろう。これが一夜のささやかな感想である。　（金沢閑居老人）